

眞生

第七卷 第十號

□世の中に人を生かす人と殺す人がある。乍然何事につけ一切を自分のこととして、考へ来るまじき、私共の心は一切を生さずにはゐられないのが本當ではないか。

□然るにもかゝはらず、何故に世の多くの人々は自らの生きたい心のあるにもかゝはらず、多くの人々を殺さうとするのであらうか。人を悪しざまにのみ見やうとするのは即ち其の人を殺さうとするのである。

□之は主として、自らを生さんが爲めには其の相手の人々を殺すことが即ち自分が生きるの唯一の道だと思ひこんだ、永い間の人間鬭争の余弊ではあるまいか。

□だから、多くの人々はいつも自らをよくせんとし、生かさうとするのに、自ら知らずして、他人を損け、他人を誹謗することを喜ばうとする。

□乍然、それは果して今日の社會に於ても、今尙必要なことであらうか。時代の進化は今や、相互扶助の精神にまで目醒めて來た秋ではないか。

□殊に佛教の第一義は仁慈にある。自分の身を殺しても一切の衆生を生かすのが即ち菩薩の大業である。而も、それがまた、一切が共に生くるの道でもある。

□如來の大悲に生きんとする我が同朋よ、今や私共の前途は全一の世界に向つて、一切を許し、一切を愛して共に向上し、發展すべきの秋である。

□さゝたる人の欠点を批難し、さゝたる人の過罪をのみ批標するの秋ではない。否、むしろ之等の一切をお互に相許し、相扶けて、少しでも之等によつて其の人を損けず、其の人を眞に生かすのが道ではないか。

□萬有が一体であり、佛凡が不二であり、凡てが救はれ。一切がよくなるのが眞に私共の望みならば、我が友よ。私達はよろしく此の心を心として、共に眞實に生くべきであらう。

(念)

目次

『おして下さる』力

魁子

病床の友と語る

土屋觀道

豫言者宮崎虎之助氏

を訪ふ

土屋觀道

旅日記

土屋觀道

吾朋便り

道友に告ぐ

土屋觀道

▽秋の陽に、柿が一つ取り残されて、赤々と輝いて居ります。いつまで見上げてゐても見飽きがいたしません。

▽喰へば一口にも足らぬ小さな柿だが、これを此儘仰いでみると、此上なく「大きく」見えて來ます——。なぜかといへば、一つの柿は一本の木に代るものなんです。根もこの一つをならせるが爲めに骨折つて居りました、葉も此一つをならせやうとして骨折つて居りました、大地もこの一つを熟らせやうとしてその有るだけの力を搾つて居りました。天も亦其恵みを此一つに集めてみえました。本當に此一つは天と地の光りと潤ひの有る丈けを享けて凝りに凝つた塊りでありました。

▽怜度母の乳が、乳房から一滴二滴と滴たるのであるが、全身の滋養と全身の精魂を籠めて滴つてゐるやうに、此柿の一つも、天と地の愛を罩めて垂れてゐる雫でありました。それを思ふと此一つは、宇宙に代る一つであります。「宇宙大」の一つであります。

▽いや柿ばかりではありません、お芋も大根も、毎日一度づゝ廻つて來る白痴の伊公も、その宇宙大の伊公であることを思ふと、涙ぐましくもなります。本當に皆、如來さまにお恵みを享けて生きてゐるのです、許されてこそ今生きて居れるのです。存在してゐるものが、既に此の大きいみ心の賜物であることを思ふと、本當に感謝と共に確りやらねばなりません。

(魁)

□私達には人にやらせやう／＼といふ心と、人からして貰ひたい／＼といふ心と、二つあります。

□一つは自分にせず、人にさせやうとするズルイ心だし、他はそれ以上に旨い結果をヨソからコロリと拾ひ込もうとする心であります。だからこんな根性の間はいつまでたつても不満が絶えません。みんなに人が働いても氣に入らぬ、又みんなに良い結果が來ても不足です、まだ足らぬ／＼と慾にかゝつてゐて、心の休まるといふ時がありません。

□自分でせんならぬ事、今せんならぬ事をして居らず、脇見ばかりして「どうなつて行くだらう」「これではどうもならぬ」と、氣ばかりを揉んでゐます。だから落附かぬのです。信仰といふことは、この足元がよく見えて、せんならぬ事がせれるやうになり、せれぬと思つてゐた事をして行く事です。私達は「自分」といふものを忘れて、「如來さま」をばかり頼り、「御慈悲」や「御蔭」がここから來るかと思つてばかりゐます。而し氣がついてみると、其御慈悲の來て居らぬ時はありませんでした。無ければ無いが儘、有れば有るが儘、片輪なら片輪のまゝ、病氣ならば病氣の儘、それが恵みであります。その力を湧かせずに「ならぬ／＼」と歎いて居ります。もつと眞剣になつて、その如來様にブチ當ると、ハツと氣附きます。それに氣づかぬとはまだ自分が怠けてゐるからです。

□だから何も心配することはない、「出來ぬ」のでもなく「さして下さらぬ」のでもなく、「せない」のです。もつと自分といふものを信用して、自分を擲る時に、必ずこの「自分」の中から大きなモノを掘り出します、必ず今迄自分の要求してゐた通りのものを掘り當てます。いやそれ以上の廣大なものを發得します、「心の所願に隨ひて、其國に生ずることを得て——」と佛が云つてみえるのはこの自大發見であると思ひます。

□誰にたよらなくとも、誰を信じなくとも、この「自分」を發見することが信仰であります。如來様を信ずるのは、この「自分」を捨て、置いて、如來様を尊ぶのではありません、この「自分」にしていたゞけるやうに御纏りするのであります。そしてこの「自分」にして戴いた時、「如來様」と「自分」とが矛盾せず、「二にして不二」、「大悲心に薰してぞ分身利物の極なけむ」と自ら教へて戴きます。

(魁子)



病床の友と語る

土 屋 觀 道

甲 「どうですか、少しはおよろしいやうですね」
乙 「大したこともありませんが、先づよい方です」
甲 「少々永引いても落膽せず、ゆづくりやりなさい、急いでも仕やうがありませんからね」
乙 「有難う、皆もさう云つて下さいます。でも、中には、まだ寝てゐるのか、早くはねばだめではないか、なぞ元氣づけてくれるものもあります」
甲 「さうですね、あまり、いつまでも寝てゐるばかりが能でもありませんからね。然しさうかと云つて、まだかまだかと云はれても、何しろこちらで好きで寝てゐるのではないのですからね。まあ、ゆづくりなほすのですよ。あまり氣をあせると反つて躰にさわれますからね」
乙 「全くさうです。まあゆづくりやるさと思つたときの方が結局、結果はよいやうです。どうも、まだかと思ふときは反つて氣があせりましてね、どうも結果が良くないやうです」
甲 「さうでせうとも、人生万事その通りですよ。何事もわざとせねばならぬと思つたことは反て甘く行かないもので、寧ろそれだけ思はぬ方がよいやうです。病氣なども一切を自然に任かせて自分にはたゞできるだけの養生をすればその方がよいやうです」

乙 「でも、かうしてゐると随分退くつなものです。全く病氣もいやになりますよ」
甲 「それは、さうでせうとも、一体病氣がいやなものですからね」
乙 「いや、病氣もいやになるたあ、少々言過ぎでしたが、之でも色々かねてから御話承つてゐるものですから、病氣についても、さう初めからいやなものだとはばかりは思いませんでしたよ」
甲 「さう思へば今でもいやなものではないかも知れませんよ。病氣した人から見れば随分達者な人がうらやましい時もあります、それでも亦達者な人から見たら、一日位病氣でもして、ゆづくり寝て見たいと云ふ人もないとは限りませんか」
乙 「僕もそんなこと思つた時もありました。でもかうしてあまりに永くなりますと、時には早くなほりたい氣もします」
甲 「それも無理からぬことです。でも、人の一生は必ずしも健康ばかりが幸福ではないかも知れません。私なんか今までの経験によると寧ろ病氣をしたことがどれほど私を修養させたかわかりません。靜に考ゆれば人は病氣の時が餘程眞剣です。さう云ふと私は人の病氣を祝福するやうですが、少しはそれもよいでせう」
乙 「それでも達者な時には達者な時、病氣の時には病氣の時で、之を常に生かして行くのが本當です。だから、早く起きあがり度いと思ふのも無理からぬことです、かど云つて、その爲めに心をいら立てたり氣をあせつたりせられてはつまらぬことです」
甲 「有難う。でも、時々早くはほりたいの、早く起きたいの考へて、随分氣をもむことがありますよ。而もそれが丸で自分で仕やうのないほどいらするのですからね而もその爲めに他の人にまであたりますからね」
乙 「全くですよ。私なんかは病氣でなくてさへ、随分氣まゝで、人に迷惑をかけることが多いので

すが、之で病氣でも仕やうものなら、それこそ、はたに迷惑をかけることでせう。あなたなんか之でも氣永い方かも知れませんか」

乙 「ところがどうして、氣永どころか、氣短かで困るのですよ。自分でもそれと知り乍ら、氣がいらいらとして仕やうがないことが多いのです」

甲 「それはお互様ですよ。尤も、時々私から見ても御氣分がさんでゐられるかと思へる時もあります。それでも私なんかに比ぶれば比較になりません」

乙 「そんなに云つて頂くと全く恐縮してしまいます。之でなかなかの氣短かです。尤もあなたの前では全く病氣さへ忘れて、自分の心もいつしか落つくのでありますが、とてもとてもそれは自分ではさへどうすることもできぬほどの氣短にさへなることがあります。之は一体どうしたらよいものでせうかね」

甲 「さう聞けばあなたもやつぱり私と同じですね。でも、私はそれが人間の持前へでないかと思ひますよ。そして私はそこが凡夫で仕方のないところだとも思つてゐます。だから自分がたゞい氣短かになりましても、私はそれを何故に氣短かになるかなど氣にしません。そして、之が凡夫だとあきらめて、其の中から、之だから如來の大悲に救はれるより他、仕方がないと、靜に念佛の中に御佛の大悲にすがるので。さうすると、不思議にも私のいらいらする心を心配する氣もなくなると同時に、何故かしら靜に自分の氣の落ついて來るのを感じます。そこが信仰の力でせうか」

乙 「さう聞けば私もやつぱりさうなのです。自分で何とかなるやうに思ふとき反つてなれず、又念佛申す氣にもなれませんが、之ではいかぬと知り乍ら、いかんとも仕やうがなくなつて苦んだはてに、さうさういかなとも仕やうがなくて、如來様におすがりするとき不思議にも私の心は

落つきます」

甲 「さうでせうとも、そこが念佛の本願です。自らおごるものは神の國に入ること能はずです。自らの至らぬことに心から氣付いて、如來の御前にひれ伏すもののみが即ち眞實の救いに入るので。それには念佛するより外に道がありません」

○

乙 「處で、このほど私は人の勧めによつて、体に一本の注射をしました。處が、どうしたわけかそれが悪くて全く困りましてね。其の苦しさ云つたら、とても何ものにも譬へ難い苦しみました。而も息はつかれなくなるし、熱はあがるし、全く伏しころびして其の痛さと苦しさで困りぬきました。愈息もつけなくなつて來たときにはこのまゝに息が絶えるか知らと思ひましてね。而も之で死にはせんかと思へたときは全く恐しくなりました。死におそはれたときの恐ろしさ淋しさと驚きとは死にたくない云ふ生に對する執着が伴つて、ほんとうに困り拔きました」

甲 「さうでしたか、今ではそんな氣はいもないやうですがね」

乙 「いや、今は全くそれも過ぎましたが、一時はどうなる事かどなやみました。たつた一つのたよりとした信仰までがあつたときは全くだめになつたのですから」

甲 「すると、病氣の爲めに其の信仰までも亡くしたと仰るのですか」

乙 「お恥しいことですが、私の普段の信仰が全くだめな信仰であつたと云ふことをあのときに至つて始めて知りました。而も知つたばかりはまだよいとして、あゝなつてしまつたときに、自分の信仰の力なさが、此の死を前にして、更にまた一層の淋しさと恐ろしさを増しましてね」

甲

「それも亦無理からぬことですが、そんな時こそ反つて宗教の必要があるのですのにね」

乙

「ところが、あゝなると普段の信仰なんて全く話になりませんね。あの時を考へると普段の信仰などあやふやなものです。私のやうなものゝ今までの信仰はかうしたときには何の力にもならぬものだ云ふことを今更のやうに知りました」

甲

「ところで、それからどうなりました。さうどうそれなりで信仰もなくなりましたか」

乙

「いやさう云ふわけではありませんが、私は若しこのまゝ死ぬやうなら、どうなることかと思ひました。従て今までの信仰の喜びなどは夢のやうになくなり、死にはせぬかと云ふ一種の恐怖に襲はれたとき、御佛の大悲を喜ぶ心が全くなくなりました。否、喜ばうと思ふ心さへなくなつて、今までの信仰が全く無くなつたやうな氣がして、非常に不安になりました。かうした時お上人がゐられたらと思ひましたが、さうもならず。全く途方にくれました。けれども、さうして困り抜いたはてが念佛でした。あゝなつて來るとお醫者も何もあつたものでないです。ね。まして多くの人達はそばにゐたつて、だめですよ。全くたよるにも頼れなくなつてしまひますからね。さうして、さうどう念佛になりました。でもあの時の念佛は全く眞劍でした。たゞ助け給へと一心におすがりする外ありませんでした」

甲

「さうでせうとも、乍然、それならばあなたの信仰は全く私の信仰と一つです。それが凡夫の宗教であり、それが人間の宗教ですよ。法然上人の念佛と云ふのもその他になにもないのです」

乙

「でもそれはどの念佛はあの時が初めてですよ。さうすると今までの念佛は一切が虚偽でした」

甲

「まさか、さうばかりとも云へますまい。その時はその時、この時はこの時ですよ」

乙

「でもあの時の念佛位眞劍な時はありませんでした。そして、之を普段の時に比べると全く普段

甲

の時の念佛はなつてゐませんですからね」

乙

「いや、それも尤ですが、さうかと云つて、今も亦あの時のやうに眞劍なれと云はれると、さうでせうか。恐くはその當時死ぬのではないかと思はれた時ほど、今は眞劍になれんではありませんか」

甲

「さう云はれると全くお恥しいことですが、その通りです。でもあの時ばかりは全く眞劍の極でした」

乙

「して見ると、あなたの信仰はあの時ばかりが眞劍であつたとすると、今の信仰もだめだとなりはしませんか」

甲

「全くです」

乙

「だから信仰と云ふものは餘程注意をしなければいけません。乍然眞實の信仰は其の人の時處位を問はず常に眞劍であるべきでせう。而も、其の眞劍と云ふことは必ずしも、之で死ぬではないかとあなたが思ひになつて、一生懸命に御佛におすがりなさいましたやうな氣分でいつも居らなければならぬと云ふものではありません。一切を如來に任かせて、常に其の慈光の中から日常の生活にしとして働くのも眞劍だし、或はまた、自ら病床に伏して靜に如來の慈光を念じて病氣の快復を待つのも決して眞劍でないとは云へません。かうした氣分や生活はその人の時と處に任かすればよいのであります。或は泣くこともありませう。或は怒ることもありませう。乍然さうしたことにかかわりなく、常に如來の大悲を仰いで一切を如來の慈光に任せ、其の中から念佛して其の人相應の生活をつゝればよいのです」

甲

「さうすると、あれはあれ、之は之でよいのです」

乙

「いいですとも、決して自分の信仰を疑いなさるな。一切は如來の御懷にあるのですもの。それ

を知らぬが凡夫の悲しさですが、それでも如來の御懷に居ることには變りがありません。だから私達は一切が如來の慈光の中にあるのだと信じて、之を自分の生活の上に常に生かして行くことが大切です」

乙 「さうすると、私のやうなこんな病氣も苦にする必要はありませんでしたね」

甲 「さうですとも、苦にするどころか感謝して行きなさい。生きている限りは死ぬ心配はありません。あなたより後から病氣した人で、あなたより先きに死んで行つた人も多數ありますよ。若も死ぬ方が道ならば、もう今のうちに大概にして死にますよ。今までも尙生きてゐるところを見ると未だ死ぬ必要がないからです。だから己は未だ死ぬものでないといふ大いばりで居りなさい。死ぬことなんか、心配せずとも大丈夫です。だからそんな心配するよりも、それらは一切を如來に任かせて、自らは如來の慈光を中心として、靜にできるだけの養生を喜びの中にすることです。さうして出来ることならば之も無理してはいけません、少しでも自分のできる範圍に於て、社會の爲めに應分の活動をすることですよ」

乙 「さうすると私はこのなりでもよかつたのでしたね」

甲 「よいどころか、大よしですよ。生きるだけ生きて、もう生きれなかつたら、その時こそ安心して死んで行きなさい。何もさう生死の問題をかれこれ云つたつて、それは私共の力の及ぶ範圍ではありません。死ぬものなら死ぬかしと一切を放鄭して、念佛こそ大切です。人の一生は限りがある。それをいつまでなご云ふならば恐くは之でよいと云ふ時はありますまい。百年生きていても千年生きていても人の望みにははてないものです。百年の後千年の後、過ぎたあとから考へれば人の一生の十年や二十年は永いも短いもありません。だから人は命の永いきよりも、自ら爲す可き眞人の生活こそ大切です。然は其の眞人の生活とは何でありませう。釋迦、

孔子、キリストの生活を御覽なさい。彼等の生活こそ正に眞人の生活であります。彼等は一切を天地の大道に献げた人です。言換れば凡てを大自然に任せた人です。自らを天地の大道に任せて、如來の大悲に生くるのが私共の生活です。だから、あなたが眞に生きるには一切を如來の大悲に任せて、念佛の中に最善を盡せばよいのです。その名が残らうと残るまいと、人がよく言はうと云ふまいと、それらはその時と處と人々に任すればよいのです」

乙 「ほんとうに、かうしてお話を聞いてゐると、丸で何一つわづらうものもなくなります。すべてがなだらかな氣分となつて、永へに慈悲の光に安ぐのを感じます」

甲 「さう云つて頂けば私もかうして御訪ねしたかいがあるやうにも感じます。人は心の満足ほど尊いものはありません。かうして皆さまから、喜んでゐたゞくのが、之でまた私の生き涯いとも云ふものです」

乙 「ほんとうに心からなる道友の訪問は嬉しくも亦有難いものはありませんですね」

甲 「全くですよ。私にも病氣したことがあります、ほんとうに之位嬉しいものはありませんですね。ではまた御訪ねしませう。よでは之で失禮します」

(附記)

謹んで之を病床の友に贈る。昭和三年十月一日東京學寮二階三疊の一室にて、午前十一時五十分。

宮島虎之助氏を訪ふ

土 屋 觀 道

今から十七八年の昔丁度私が宗教大學に在學の頃氏は自ら豫言者として「吾人はすべからく神の生活を始めざるべからず、吾人はこのまゝ己に神たるなり」と宣言して、一時世人の耳目をさわがせた人である。

然に當時私は此の人の言行を見聞して、いたく其の心を動かすものがあつた。殊に自らを豫言者として、而も自ら神人を以て自任し、我人皆神たるの生活を爲すべきことを以てしたことは、近頃珍らしきできごとであつた。尙其の妻光子女史が正直にも之を信じ、又五三の信者が氏を中心として其の道を宣傳した有様は、之を見る者をしてそぞろに心膽を寒からしむるものがあつたのである。

私は當時、神の生活を欲して能はず、漸く念佛の信仰によつて其の欲求を充たすの一人であつた。故に、自ら

之に投ずるの心も起らず、又氏を私の思ふ意味に於て、神とも信ずることは出来なかつたが、而も、氏等の一行が其の道の爲めに獻身の努力を以て、日夜その主義の爲めに宣傳に忠實なるを見るに至つては、其の説の何如は暫く別として、其の熱烈なる態度に於て、私は深く敬意を表していた一人であつた。

かくて、光子女史は肺患に斃れ、其後宮崎氏は其の女照子氏と共に、地方傳道に立たれたと聞いた。私が氏に會つて親しく其の説を聞いたのは其の數年も前であつたかと思ふ。

その後、私は念佛の道にいそしみ、宗大を出て、各地に傳道を試むその身となつたが、或る年九州柳河に行つた時、氏が其の土地に來てゐることを知つた。氏は九州柳河の人、久々に郷里に歸り、其の土地に於て我が道を説くのであつた。其後亦私が柳河に行つたとき、氏は筑

後の大牟田に於て入院の身となり、少女照子氏は其の父の爲めに衣食を人々に乞ふて之を養ふといふ話さへ聞いた。

其後氏は満鮮の地に旅立つて、道を説くとのことを聞いたが、私の心には氏の風貌を慕ふものが多かつた。

それは氏と私との間に何者か相通するものがあるからである。私が氏の爲めに其の健康を祈り、道の爲めに盛ならんことを願つたのも、その爲めであつた。

其の後或は神戸地方に氏がゐるとのことを聞くこともあり、又同地に氏の熱心なる信者のある由も聞いたが、私は神戸に度々行くにかゝはらず、自分つ道に急がしくして親しく之を訪ねるの暇も無かつた。

乍然今日の多くの宗教家の中。眞に道を説く人の甚だ少ない時、氏の如き熱烈火の如き人を得たことは、私の生活に於て決して無意義なことではなかつた。

二

然に近頃、私は私の主義宣傳に急がしくて、殆ど氏を思出すの暇もなかつた。殊に此の二三年は其の消息をさへ知らなかつた。然るに先月の自勵々話の誌上に、氏が西川光次郎氏に寄せた手紙を讀んで、始めて氏が病床の人となり、今や再び立つことのできぬ身となつてゐると

云ふことを知つた。

私が氏を訪ねて見たいと思ふ心になつたのはこの時であつた。「其の手紙の通りだとすると、氏はもう再び此の世に立つことのできなない人である。それにしても、氏の其の後の傳道はさうなつたであらう。そして又、あの當時の豫言者としての神々しい氏の風貌はさうなつたか。

其の後照子女史はさうしたか、聞けばもう年も十九ときく、さぞ大きくなつたことだらう。其の女史の信仰やいかに、或は父君の遺傳も受け、母親の姿にも似て、美しい神の生活を叫んでゐるのであらうか。それにしても一切を道の爲めに放擲して顧みぬ氏等のことなれば、其の毎日の生活にもこと欠くことはないかしら、今一度親しく氏を訪ねてその風貌にも接し、又出来ることならば幾分の生活の補助でもさして貰はうか」とこんな心が私の心に起きたのも其の時であつた。

其の後、東京に私は歸ること二度であつた。けれども色々のことに忙がしい私は、それほさまでに思ひ乍らにも之に遇ふ暇がなかつた。

乍然それにしても其の後も氏の生活が經濟的に困難ではないかと云ふことが常に思はれて、氏の病床を偲びては同情に堪えぬものがあつた。そのほか、氏の一生のうち今一度遇つておきたいとの心も起つたので、愈々今は

氏を訪ねる心にもなつた。氏の十数年の傳道の苦心には必ずそれだけの専い熱心な面影は私をして深く教ふるものがあらうとも思つた。

斯くて昨朝阪神地方の傳道を終えて焼津から歸京した私は、今日午後四時三十分、氏を本郷原町一四四の神生教壇本部に訪ねた。本部は一寸町から奥まつたところ、小さい洋館造りであつた。門札を見ると、一枚の枚に宮崎虎之助、宮崎照子と並べ、其の左にやゝ小さき文字で一段下げて五六人ばかりの男女の名が並べ、書かれてあつた。

先方に私の來意を告げて面會を求めたとき、若き一人の女は合掌の中に私を迎え、其の意を得て二階に昇つた。程へて、一人の青年が下りて來て再び私の來意を問ふた。私の舊知のことを告げたので「實は醫師が面會を禁じてゐるのですが、それでは一寸お待ち下さい」と再び二階に引かへし、やゝ暫くしてから又降りて來た。ごく静な聲で、

「では五分間位會つて下さい。先生が會うといはれましたから」と。氏は非常に重患の模様である。

「承知した。その前に一寸お尋ねしておきたいが」と私は氏が東京に何月頃歸つたかを尋ねれば、

「本年の一月でした。それまでは神戸の方でおやすみで

したが、病床のまゝ東京に歸られました。一月許り順天堂に入院されたが、永くもゐられないので、當地へ來られた」と、つゝましかにその青年は答へた。

この青年は何といふ名前の人か私は知らない。乍然可なり眞面目であることだけは確かである。年は二十四五にも見えるか。此の外にも四五人の青年男女がいるやうだつた。下駄や靴などが亂雑にぬぎすてられてあるのを見ると、其の家の中の疊や立具などの古びたのと掃除などの行届かぬのと併せて、あまりにその方に心する人のないことを思はれた。又この青年の全く汗ににじんだユカタが見にくいほど垢づいて破れているのを見ると、其の生活のほごも思はれた。十五六の青年が二階から口笛吹いて下りて來るのを見た。

それはともかく、私は靜に二階に昇つた。二階は十五疊敷位の枚張りの洋室と六疊位の二間である。そして氏は其の廣間の方に寢台を据えて寢てゐた。

三

その面影は十数年の昔にも變らなかつた。だゞ昔に比して、少々髪と鬚とは白毛が交じつていた、鬚髪共に昔のやうに長くのびたまゝである。そして老眼鏡をかけていたのが昔と違つていた。私は二階を昇るとき石炭酸の

香いがするので、之はきつと肺患だなと思つた。氏はそれの爲に今や立つことのできぬ重患の人となつたやうである。氏は病床に居て全く普通の人になつてゐる。而もごくなつかしい、平生のまゝの病人であつた。

「いつか會つたことがあるかね」と氏は尋ねた。あうむけになつたまゝである。

「もう十数年にもなりません。あなたが白山上に居た頃です」と私は氏の前にある一つのイスに腰掛けざまにかう答へた。

「どこにいるか」氏は私の何者なるかを知りたい模様であつた。

「芝です、増上寺の近くです」と私は答へた。

「何をしてゐるのか」と尋ねるので、

「僕は淨土宗の僧侶です」すなほに答へた。

「さうして淨土宗なんになつたのだ」と少し疑問の眼を光らせた。

「私の信仰關係もあるが、郷里の寺が淨土宗であつたから」とごくあつさりと答へた。成可く氏に言葉をかけさせまいと思ふからである。それは氏の重患の方を思ふからであつた。

「誰について學んだか」と氏は私の來歴を知らうとした。

「宗教大學に於て主として淨土宗を専攻したが、中島觀瑠と云ふ人の弟子となつた」と私はたゞありのまゝを平凡に答へた。氏も亦きわめて靜かであつた。そこには何の隔意もない。

「淨土宗と眞宗とを一にしたやうなものがよくはないか眞宗は余りに俗になり過ぎた。本堂なんかも淨土宗はまだ天台などのよい所が残つてゐる」と氏は一般佛教界を心に思い浮べてゐるやうだつた。

「或はさうかも知れませぬ。でも僕には今日の既成宗教は満足がでなぬ、今日の僕は已に宗派なき見ていない方ですから」氏に私の宗教を説くにはあまりに其の時でなかつた。

氏は尙二三、語りつゞけたが、可なりにつらさうにも見えたので、殆んど私からは一切尋ねることはしなかつた。又尋ねるものもなかつた。

「渡邊海旭は今さうしてゐる」「氏は一宗に偏せぬところがよい」「社會事業の方が主であるか」などと渡邊海旭師のことを尋ねた。又今岡信一郎氏のことなども尋ねた。「今度の宗教大會には出たか」なども尋ねた。

「あまりに一宗に偏してはいかぬ、とかく一宗に偏すれば他の宗のことが見えぬ。従つて我田引水になり易い」とも云つた。

「今度は自分は死ぬのだ。それでそれまで書いておかねばならぬことで忙しい」とも云つた。

「今日はつかれたから、これ位にしてまたきてくれ、少々づゝならいつでもあうから」と彼は云つた。

其の側に居た青年も

「ではもう之で一先づ遠慮して下さい。先生は今全く病苦と闘つて、その間今までの舊稿の整理や、今度書いて置かねばならぬことなぞで、一々自ら筆をとつて居られるので、今のところ全く一分でも先生の生命は實に重大なものですから」と云ふ。生命の尊さと時間の大切なことは必ずしも氏ばかりではない。自分はわざ／＼二時間もかゝつて訪問しているのに、其の私の厚意も知らぬかと少々不足にも思つたが、先方の立場から云へば、それも亦無理からぬと、其の實今暫くも静にその側に居たいとは思つたが、いつまでもさうしても居られぬので遂に其の家を出た。

私が氏の病室に入つたときは五十位の看護婦かと思ふ一婦人が居たがやがて合掌の中にまた夕方にはまゐりますと云つて出て行つた。彼の女が静に合掌の中に祈つて去つた所を見ると、氏の信者の一人かもしれぬ。氏は水枕をして其の上を又水囊で冷してゐた。氷を買ふ金も無いからであらう。

氏の原稿はアルス社から出るのではないか、アルス社の状態に氏の原稿の校正刷が入れてあつた。

四

私が氏の宅を訪れたのはこれ十二三分間位もかつたらうか、それでも私にはそれが丁度長くもなく短くもなく全く日頃の願いが叶つたやうの感じであつた。

そして私にはそれが限りなく嬉しかつた。氏の室を出る刹那、其の室の一隅に一人の若い婦人が之も亦病床にあるのを見た。照子氏でないかと思つたので、其の由を青年に尋ねるとさうだと云ふ。

「今一人男の人が下に結核で寝てゐます」と二階から下り乍ら階下の奥を指して云つた。私は之を聞き乍ら「何とした悲惨な事であらう」と思つた。そして「此の世の多くの人々があらゆる罪惡を構ぜざるなき時に於てかゝるまじめな人々の集りにかくもいたましい病魔の襲ふとは何とした事であるか」とさへ慨せざるを得なかつた。

私は世の多くの人々たちと、又自ら宗教家と名のる所の宗教家とを之等の人の生活に比べて私は是等の人々の清い尊い生活を一層になつかしくも亦尊く感ぜざるを得なかつた。清貧洗ふが如きこの生活と道を求め道を説く爲めの結果と思へば、むしろ十字架にかゝる一時の苦難

五

世の多くの人々の中、同じ病床の人も多いことである。乍然、それらの人々の中、はたして幾人が眞に自らを生かしつゝある人があらうか。中には自分の病が不治の病と聞いて、心も心ならず絶望落膽して淋しくも其の所に困つてゐる人もあらう。又不治の病とも限らぬものを、自分獨りでさうきめて自ら困つてゐる人もあるかも知れぬ。又中には毎日々々病床に自らの命を徒費して何等爲すこともなく、その日を送つてゐる人もないに限らぬ。

然に之等の人々に對して、合宮崎氏のこの生活は果してどんな生活であらう。死を知ることによつて其の死の中に自らの爲すべき仕事に全身を捧げて忙がしいと云ふことは何と云ふ尊い生活ではないか。世の多くの人々は恐らくは其の病氣がなほつても更に何事もせないで遊び暮すであらうの。

静に人生の一生を思ふ時、私はうたゝ人生の將來を想ふ。おゝ世の多くの人々よ、諸君は徒に此の尊き自己の生命を徒に消費してよいと思ふか？

其の時側の青年は云つた。
「先生はかうした重患の中からも、一刻も休むときもなく働きつゞけてゐられます。死のみが先生の永劫の休みですから。先生は生きてゐらるゝ間はいかなる場合にも働かれるのです。而も今は全く一分も先生の爲には大切な時間です。だからまたのちにして下さい」と云ふ。

そして青年は、私とかうして話してゐるのも亦時間も惜いと云ふやうな面持ちであつた。原稿の二三を指してそれも見せた。

(三・七・二四・午後十二時 東京學寮にて、
— 全三・九・三〇 東京にて再校)

—(六月のこと)—

土 屋 觀 道

○東京出發、六月四日、朝の急行で品川を立つ、全家して玄關まで見送つてくれた。光道さんがお母さんにだかれ乍ら見送ってくれるやうになつたので、お父さまの喜びも一層にまじたまふべきである。

先方三河に着いたのは其の日の四時頃でけつた。

○舉母町の三昧會、道友の方々は八九名も出迎えてくれた。久々での集りなので皆が一層に待ち設けられるのが目につくやうである。先づ今度の道場西栖院につく、それから亡くなられた成田氏の靈前に詣で、この夜は主として青年有志の集りで禮拜儀をやる近頃さもすれば弁榮上人の滅後、年をふる

に従つて禮拜儀がまちまちになつて、地方的自己流にならうとする傾きが多いので、之が統一を計つたらこの議も起つた。

○五、六、七日の三昧會、當地の集りは此前に比し、主として青年と有識階級の人々のみである。それに眞宗系の熱心な人々や、今まで全く寺などへは参らなかつたと云ふやうな人々の多かつたことは一層に道友の喜ぶところであつた。之は主として從來の寺院佛教にあきたらぬ人々であること云ふことを主として物語るものであり、又今後の私共の教團の前途が如何なる運命にあるかを物語るものである。集る者八九十名から百名の近くである。

○多數寺院の隨喜、尙こゝに特記したいことは、此の地方の寺院方の隨喜である。之は主として此地の性源寺様や洞泉寺の御住職が日頃から私共の運動に共鳴せられ、あらゆる場合に一家擧つて此の慈光の宣傳と其の了解とに御盡力下さる点も任つて力あることではあるが、當地方一般の寺院方が此の光明

主義の眞意を大いに了解して頂くやうになつたからによることも勿論である。

○寺院方との相談、私はかゝる多數寺院の心からなる隨喜を喜んで、之等の寺院方に御あいさつしたいことを特に願ひ出で共に語つた。今後の祖會と寺院との關係に於て、どうした方針をとつたなら眞の調和がされるか云ふことであつた。

それは時代に相應した眞の佛教によればならぬことは無論であるが、それに付私共人類の生活を助くる教へでなくてはならぬこと云ふことを語つた。

そして又それは常に私共の生活の慰安となり、併せて活動の源泉となる可き宗教でなくてはならぬこと云ふことも話した。而も亦、それが寺院そのものの、存在の價値であり、寺院發展の要因でもあること云ふことを相談した。

(以下次號)